

〈資料1〉戦前の東大哲学科教員一覧表（明治19-昭和17年度）

年度	教授・教師	助教授	講師
1886（明治19）	ノックス		
1887（明治20）	ブッセ		
1888（明治21）	ブッセ		
1889（明治22）	ブッセ		
1890（明治23）	井上・ブッセ		
1891（明治24）	井上・ブッセ		
1892（明治25）	井上・ブッセ		
1893（明治26）	井上・ケーベル		
1894（明治27）	井上・ケーベル		
1895（明治28）	井上・ケーベル		
1896（明治29）	井上・ケーベル		
1897（明治30）	井上・ケーベル		
1898（明治31）	井上・ケーベル		松本（文三郎）
1899（明治32）	井上・ケーベル		桑木
1900（明治33）	井上・ケーベル		桑木
1901（明治34）	井上・ケーベル		桑木
1902（明治35）	井上・ケーベル	桑木	
1903（明治36）	井上・ケーベル	桑木	
1904（明治37）	井上・ケーベル	桑木	松本（文三郎）
1905（明治38）	井上・ケーベル		松本（亦太郎）
1906（明治39）	井上・ケーベル		小林
1907（明治40）	井上・ケーベル		小林
1908（明治41）	井上・ケーベル		小林
1909（明治42）	井上・ケーベル		小林
1910（明治43）	井上・ケーベル		小林
1911（明治44）	井上・ケーベル		今福・紀平
1912（大正元）	井上・ケーベル		大島・今福・紀平
1913（大正2）	井上・ケーベル		大島・今福・紀平
1914（大正3）	井上・桑木		大島・波多野・今福・紀平
1915（大正4）	井上・桑木		大島・波多野・今福・紀平・得能
1916（大正5）	井上・桑木	大島	波多野・今福・紀平・得能
1917（大正6）	井上・桑木	大島	波多野・今福・紀平・得能
1918（大正7）	井上・桑木	大島	石原・今福・紀平・得能

1919 (大正 8)	井上・桑木	大島	石原・今福・紀平・得能
1920 (大正 9)	井上・桑木	大島	石原・今福・紀平・得能
1921 (大正 10)	井上・桑木	大島・石原	今福・紀平・得能・鹿子木
1922 (大正 11)	井上・桑木	大島・石原	今福・紀平・得能・鹿子木
1923 (大正 12)	桑木	大島・石原	今福・伊藤・紀平・得能
1924 (大正 13)	桑木	大島	伊藤・紀平・得能
1925 (大正 14)	桑木	出	伊藤・紀平・得能・大島・河野
1926 (大正 15)	桑木	出	伊藤・紀平・得能・大島
1927 (昭和 2)	桑木	伊藤・出	紀平・大島
1928 (昭和 3)	桑木	伊藤・出	紀平・大島
1929 (昭和 4)	桑木	伊藤・出	紀平・大島
1930 (昭和 5)	桑木・伊藤	出	紀平・大島
1931 (昭和 6)	桑木・伊藤	出	紀平・大島
1932 (昭和 7)	桑木・伊藤	出	紀平・大島
1933 (昭和 8)	桑木・伊藤	出	紀平・大島
1934 (昭和 9)	桑木・伊藤	出	大島
1935 (昭和 10)	伊藤・出		池上・大島・金子
1936 (昭和 11)	伊藤・出	池上	大島・金子
1937 (昭和 12)	伊藤・出	池上	大島・金子
1938 (昭和 13)	伊藤・出	池上	大島
1939 (昭和 14)	伊藤・出	池上	大島
1940 (昭和 15)	伊藤・出	池上	大島・桂
1941 (昭和 16)	伊藤・出	池上	桂・石原
1942 (昭和 17)	伊藤・出	池上	桂・武田

※ 年度の途中で役職が変更になったり、担当教員が交替したりする場合があるが、上記の表は各年度始めを基準に作成した。

〈資料2〉 戦前の東大哲学科教員の就任日・退任日

氏名	助教授		教授	
	就任日	退任日	就任日	退任日
井上哲次郎	1882年3月4日 (明治15年3月4日)	1884年2月12日 (明治17年2月12日)	1890年10月23日 (明治23年10月23日)	1923年3月31日 (大正12年3月31日)
桑木巖翼	1902年2月24日 (明治35年2月24日)	1904年12月29日 (明治37年12月29日)	1914年7月31日 (大正3年7月31日)	1935年3月30日 (昭和10年3月30日)
大島正徳	1916年11月18日 (大正5年11月18日)	1925年9月23日 (大正14年9月23日)	1925年9月24日 (大正14年9月24日)	1925年9月25日 (大正14年9月25日)
石原謙	1921年8月8日 (大正10年8月8日)	1924年6月8日 (大正13年6月8日)		
伊藤吉之助	1926年10月4日 (大正15年10月4日)	1930年5月23日 (昭和5年5月23日)	1930年5月24日 (昭和5年5月24日)	1945年10月3日 (昭和20年10月3日)
出隆	1924年10月20日 (大正13年10月20日)	1935年4月3日 (昭和10年4月3日)	1935年4月4日 (昭和10年4月4日)	1951年3月31日 (昭和26年3月31日)
池上謙三	1936年3月31日 (昭和11年3月31日)	1945年12月11日 (昭和20年12月11日)	1945年12月12日 (昭和20年12月12日)	1956年1月29日 (昭和31年1月29日)
桂寿一			1953年4月1日 (昭和28年4月1日)	1963年3月31日 (昭和38年3月31日)
岩崎武雄	1947年3月31日 (昭和22年3月31日)	1956年5月31日 (昭和31年5月31日)	1956年6月1日 (昭和31年6月1日)	1974年4月1日 (昭和49年4月1日)

国籍	氏名	氏名(外国語表記)	就任日	退任日
米	アーネスト・フェノロサ	Ernest Fenollosa	1878年8月10日 (明治11年8月10日)	1886年8月1日 (明治19年8月1日)
英	チャールズ・ジェイムズ・クーパー	Chrles James Cooper	1879年4月11日 (明治12年4月11日)	1881年7月10日 (明治14年7月10日)
米	ジョージ・ウィリアム・ノックス	George William Knox	1886年9月 (明治19年9月)	1886年12月 (明治19年12月)
独	ルートヴィヒ・ブッセ	Ludwig Busse	1887年1月10日 (明治20年1月10日)	1892年12月2日 (明治25年12月2日)
露	ラファエル・フォン・ケーベル	Raphäl von Koeber	1893年6月10日 (明治26年6月10日)	1914年7月31日 (大正3年7月31日)

〈資料3〉『東京大学法理文三学部一覧』哲学科教科細目（明治13-16年度）

○『東京大学法理文三学部一覧／明治13-14年』

哲学

論理学并心理学の原理は凡百の学術研究の爲めに最も緊要の関係を有するを以て法理文学部共に其第一年に於て各自専修の科目の外特に該二課目を教授す

教科書　ゼボン氏著論理学  
          バイン氏著感覚智力論

文学第二年に於ては心理学の稍、形而下（コンクリート）に渉れるもの又哲学及び生物学の原理を研究せしめ生徒をして心、体の相関係する所以并に意識（コンシャスネス）と体様（ボデー）と相並行する所以を知らしむ本年に於て又デカルト氏よりヘーゲル、スペンセル諸氏に及べる近世哲学史の概略を授く然る所以の目的は元來欧州近世哲学史たる一理の徹底邁進せるものにして論理学上恰も今日学生思想の進歩に適應すべきものたるを示すに在り且つ該科は専ら口授を主として精核に各種哲学論の要領を得せしむるが故に学生は之に由て后来諸家の著書を繙くに方り容易に其蘊奥を闡ふことを得べし又其純精哲学の論文を新古を撰ばず一に哲学本理に據て之を批評するの学力を得せしむ

教科書　バイン氏著心理学  
          カルペンクル氏著精神生理学  
          スペンセル氏著原理物論  
          スペンセル氏著生物原論  
参考書　モースレー氏著精神生理及病論  
          アベルクロンビー氏著智力論  
          ハッケル氏著創造史  
          シュウェグレル氏著及リュイス氏著哲学史  
          ボウエン氏著近世哲学史

第三年に於ては近代の心理学、哲学の緊切なる結果の概要を講義するの後専ら道義学を研究せしむ

教科書　バイン氏著心理学  
          バイン氏著道義学  
          スペンセル氏著道義学論科  
          アリストートル氏著道義学  
          セジウィク氏著道義学  
参考書　ベンサム氏著道義及立法論綱  
          ミル氏著利学  
          バトレル氏著人性論  
          カント氏著道義論  
          ホップス氏著シセロー、デ、ヲプシアイス

第四年に於ては講義を分ちて甲乙の二種とす即甲の講義は心理学及び近世哲学の諸論説（システムス、オフ、モデルン、フヒロソヒー）中較々著るき者を授くるを専務とし其他人類と下等動物との心力（メンタル、パウル）の比較、太古と開明時代間の人心の変遷、動物及人類の表情言

語（エモーショナル、ラングエー）、模擬言語（イミテチブ、ラングエー）及其修文（カルチュール）変遷等の諸題を研究せしむ

- 教科書 スペンセル氏著心理学  
ミル氏著ハミルトン氏哲学  
フキスケー氏著万有哲学
- 参考書 ダルウヰン氏著生物原始論  
ダルウヰン氏著人類原始論  
ダルウヰン氏著情思発顕論  
リュイス氏著哲学史  
タイロル氏著原民社会論  
タイロル氏著太古人類史  
ルーボック氏著開化起原論  
レッケー氏著欧土明理説  
スペンセル氏著万物開進論  
スペンセル氏著新論文集  
ミル氏著論文集

乙の講義は欧州哲学上特に其思想沿革史をデカルト、スパイノザ、バークレー、ヒューム、及びカント諸氏の著書に憑據して之を授け且つ学年の一部分は全くクリチック、オフ、ピュワ、リーゾン即ち純理論を研究せしむ

- 教科書及参考書
- デカルテ氏著哲学  
デカルテ氏著メヂテーション  
スパイノザ氏書  
カント氏著純理論  
ケヤード氏著カント氏哲学  
マホフヒー氏著カント氏純理論  
ヒューム氏著人性論  
レイド氏著心理論  
ウッレース氏著ヘーゲル氏論理学  
リュイス氏著哲学史  
ユーベルウヰク氏著哲学史  
ミル氏著ハミルトン氏哲学

○『東京大学法理文三学部一覽／從明治 14 年至明治 15 年』

〔哲学〕

論理学は凡百の學術研究の爲に最も緊要の關係を有するを以て法理文学部共に其第一年に於て各自専修の科目の外特に該課目を教導す

- 教科書
- ゼボン氏著論理学  
エプエレット氏著論理学

第二年に於て授くる講義の課目三あり即ち第一心理学第二哲学史第三世態学是なり

第一 心理学（精神の解及哲学の原理総論）

精神生理学を教導し以て学生をして心、体の間恒に密着の関係を有するものなることを知らしめ且心は決して或る心理学者の想像する如き独立主宰の性質あるものに非ずして常に心上凡百の動作のみならず所謂意志と雖も身体機関（オルガニスム）の状態に関せずして全く独立するものに非ざる所以を覚知せしむるものとす

用書はバイン氏著心理学、カルペンタル氏著精神生理学、マーズレー氏著精神生理及病理学、アベルクロンビー氏著智力学、ヘッケル氏著創造史、スペンセル氏著哲学原理総論及スペンセル氏著生物原論等とす

## 第二 哲学史

欧州古今の哲学史の概略を講じデカルト氏よりヘーゲル氏スペンセル氏に至る近世哲学の考究に最も多く力を尽さしむるものとす而して哲学論旨中百家其説を同帰する所の一理を発見せしめ以て徒らに孤行の学派に偏傾するの弊なからしむるを目的とす蓋し斯の如く教導するときは現時に行はるる哲学専攻に善良なる楷梯をなすべきを以てなり参考書はシウエグレル氏著哲学史ボーウエン氏著近世哲学を用ひ専ら講義を以て授くるものとす

## 第三 世態学

哲学の主義に協合する社会組織の状況の稍<緊要なるものを十分に曉知せしむべき概旨を講授す尤スペンセル氏著世態学、モルガン氏著古代社会論を以て参考書とし専ら講義を以て教導するものとす

第三年に於て授くる講義の課目二あり即ち第一近世哲学第二印度及支那哲学是なり

### 第一 近世哲学

欧州近世哲學家中最も著名なる三氏の哲学を一層細密に講ず固より始終諸哲学科の説と比較し以て其理を明晰ならしむ三氏とはカント、ヘーゲル、スペンセルにして蓋し其哲学の現時の問題に最も緊切なる関係を有するものなるが故に乃ち選択するなり

用書はカント氏著純理論、ワレース氏著ヘーゲル氏論理学、スペンセル氏著心理学第二卷、ミル氏著ハミルトン氏哲学及ヒューム氏著人性論とし且講義も亦之を授く

### 第二 印度及支那哲学

印度及支那哲学に於ては専ら仏教、儒教の大意綱要を講授す教科書は八宗綱要、輔教編、大学、中庸、論語、孟子とす

第四年に授くる講義の課目三あり即ち第一心理学第二道義学及審美学第三印度及支那哲学是なり

### 第一 心理学

本年に於ては漸く進て高等なる心理学を学ばしめ其他人類と下等動物との心力の比較、大古と開明時代間の人心の変遷、動物及人類表情上の言語及用智上の言語、及修文の変遷等の諸題を研究せしむ

用書はダルウキン氏著生物原始論、ダルウキン氏著人類原始論ダルウキン氏著情緒発頭論リュイス氏著哲学史、タイロル氏著大古人類史ハーボック氏著開化起原論、レッケー氏著欧土明理説、スペンセル氏著万物開進論、スペンセル氏著心理学フキスク氏著万有哲学スペンセル氏著新論文集ミル氏著論文集等とす

### 第二 道義学及審美学

道義学に於ては近世専ら規画する道德を学術的理論に據りて論究し正明なる道德教を事理上より推定せんとする論理の確實なるかを考究するものとす又審美学に於ては各般の美術の妙趣を精確に鑑定するの基本たる批評の真理を細論するものとす

シドクニック氏著道義学を教科書とし兼て講義を授く尤カルテルウードペンタム及スペンセル諸氏の所著に係る道義学書を参考とす

### 第三 印度及支那哲学

本年に於ては第三年に教導を始めたる仏教儒教を尚引續きて講授し且老莊の学をも併せ考究せしむるものとす教科書は四教儀、維摩經、詩經、書經、易經、老子、莊子とす

○『東京大学法理文三学部一覽／從明治 15 年至明治 16 年』

論理学は凡百の學術研究の爲に最も緊要の關係を有するを以て法理文学部共に其第一年に於て各自専修の科目の外特に該課目を教導す

教科書

ゼボン氏著論理学

エプエレット氏著論理学

哲学は分て東洋及び西洋の二とす東洋哲学に於ては第二年に東洋哲学史第三及第四年に印度及支那哲学を教導するものとす

東洋哲学史（第二年）

東洋哲学の沿革を論ずるには支那哲学と印度哲学とを以て至要なるものとす而して日本哲学は主として支那哲学に出て支那後世の哲学は大抵秦漢以上の哲学に本づくを以て先づ孔孟老莊楊墨等の哲学より始め或は其是非を論じ或は其得失を弁じ或は其關係伝統及び流派等を論証弁明し以て漸次に東洋一般の哲学を知らしむるの方をなすものなり其参考書目は論語、孟子、楊子、纂論、大学、墨子、中庸、荀子、老子、韓非子、莊子、楊子方言、列子、管子、淮南子とす

印度及支那哲学（第三年及第四年）

印度及支那哲学に於ては第三第四の兩年間専ら仏教、儒教の大意綱要を講授し且第四年には老莊の学をも併せて考究するものとす其教科書は八宗綱要、輔教編四教儀、維摩經、大学、中庸、論語、孟子、詩經、書經、易經、老子、莊子とす

西洋哲学に於ては第二年に心理学、西洋哲学史、世態学、第三年に近世哲学、第四年に心理学、道義学及審美学を教導するものとす

第一 心理学 精神の解及哲学の原理総論（第二年）

精神生理学を教導し以て学生をして心、体の間恒に密着の關係を有するものなることを知らしめ且心は決して或る心理学者の想像する如き独立主宰の性質あるものに非ずして常に心上凡百の動作のみならず所謂意志と雖も身体機関（オルガニスム）の状態に関せずして全く独立するものに非ざる所以を覚知せしむるものとす

用書はバイン氏著心理学、カルペンタル氏著精神生理学、マーズレー氏著精神生理及病理学、アベルクロンビー氏著智力学、ヘッケル氏著創造史、スペンセル氏著哲学原理総論、及スペンセル氏著生物原論等とす

第二 哲学史

欧州古今の哲学史の概略を講じデカルト氏よりヘーゲル氏スペンセル氏に至る近世哲学の考究に最も多く力を尽さしむるものとす而して哲学論旨中百家其説を同歸する所の一理を發見せしめ以て徒らに孤行の学派に偏傾するの弊なからしむるを目的とす蓋し斯の如く教導するときは現時に行はるる哲学専攻に善良なる楷梯をなすべきを以てなり参考書はシウエグレル氏著哲学史ボーウェン氏著近世哲学を用ひ専ら講義を以て授るものとす

第三 世態学

哲学の主義に協合する社会組織の状況の稍<緊要なるものを十分に曉知せしむべき概旨を講授す尤スペンセル氏著世態学モルガン氏著古代社会論を以て参考書とし専ら講義を以て教導するものとす

近世哲学（第三年）

欧州近世哲学者中最も著名なる三氏の哲学を一層細密に講ず固より始終諸哲学科の説と相比較し以て其理を明晰ならしむ三氏とはカント、ヘーゲル、スペンセルにして蓋し其哲学の現時の問題に最も緊切なる関係を有するものなるが故に乃ち選択するなり

用書はカント氏著純理論、ワレース氏著ヘーゲル氏論理学、スペンセル氏著心理学第二卷、ミル氏著ハミルトン氏哲学及ヒューム氏著人性論とし且講義も亦之を授く

#### 第一 心理学（第四年）

本年に於ては漸く進て高等なる心理学を学ばしめ其他人類と下等動物との心力の比較、大古と開明時代間の人心の変遷、動物及人類表情上の言語及用智上の言語、及修文の変遷等の諸題を研究せしむ

用書はダルウキン氏著生物原始論、ダルウキン氏著人類原始論、ダルウキン氏著情緒発顕論、リュイス氏著哲学史、タイロル氏著大古人類史、ルーボック氏著開化起原論、レッケー氏著欧土明理説、スペンセル氏著万物開進論、スペンセル氏著心理学、フキスク氏著万有哲学、スペンセル氏著新論文集、ミル氏著論文集等とす

#### 第二 道義学及審美学

道義学に於ては近世専ら規画する道徳を学術的理論に據りて論究し正明なる道徳教を事理上より推定せんとする論理の確實なるかを考究するものとす又審美学に於ては各般の美術の妙趣を精確に鑑定するの基本たる批評の真理を細論するものとす

シドクニック氏著道義学を教科書とし兼て講義を授く尤カルテルウード、ベンタム及スペンセル諸氏の所著に係る道義学書を参考とす

#### ○『東京大学法理文三学部一覽／從明治 16 年至明治 17 年』

論理学は凡百の學術研究の爲に最緊要の関係を有するを以て法理文学部共に其第一年に於て各自専修の科目の外特に該課目を教導す尤法理学部学生には半年間文学部学生には一年間之を教導するものとす

##### 教科書

ゼボン氏著論理学エブレット氏著論理学

哲学は分て東洋及び西洋の二とす東洋哲学に於ては第二年に東洋哲学史第三及第四年に印度及支那哲学を教導するものとす

#### 東洋哲学史（第二年）

東洋哲学の沿革を論ずるには支那哲学と印度哲学とを以て至要なるものとす而して日本哲学は主として支那哲学に出て支那後世の哲学は大抵秦漢以上の哲学に本づくを以て先づ孔孟老莊楊墨等の哲学より始め或は其是非を論じ或は其得失を弁じ或は其關係伝統及び流派等を論証弁明し以て漸次に東洋一般の哲学を知らしむるの方をなすものなり

##### 参考書

論語、孟子、楊子、纂論、大学、墨子、中庸、荀子、老子、韓非子、莊子、楊子法言、列子、管子、淮南子とす

#### 印度及支那哲学（第三年及第四年）

印度及支那哲学に於ては第三第四の両年間専ら仏教、儒教の大意綱要を講授し且第四年には老莊の学をも併せて考究するものとす

##### 教科書

八宗綱要、輔教編、四教儀、維摩經、大学、中庸、論語、孟子、詩經、書經、易經、老子、莊子

西洋哲学に於ては第二年に心理学、西洋哲学史、社会学、第三年に近世哲学、第四年に心理学、



道義学及審美学を教導するものとす

#### 第一 心理学 精神の解及哲学の原理総論（第二年）

精神生理学を教導し以て学生をして心、体の間恒に密着の関係を有するものなることを知らしめ且心は決して或る心理学者の想像する如き独立主宰の性質あるものに非ずして常に心上凡百の動作のみならず所謂意志と雖も身体機関（オルガニスム）の状態に関せずして全く独立するものに非ざる所以を覚知せしむるものとす

教科書

バイン氏著心理学、カルペンタル氏著精神生理学、マーズレー氏著精神生理及病理学、アベルクロンビー氏著智力学、ヘッケル氏著創造史、スペンセル氏著哲学原理総論及スペンセル氏著生物原論等

#### 第二 哲学史

欧州古今の哲学史の概略を講じデカルト氏よりヘーゲル氏スペンセル氏に至る近世哲学の考究に最も多く力を尽さしむるものとす而して哲学論旨中百家其説の同帰する所の一理を発見せしめ以て徒らに孤行の学派に偏傾するの弊なからしむるを目的とす蓋し斯の如く教導するときは現時に行はるる哲学専攻に善良なる楷梯をなすべきを以てなり

参考書はシウエグレル氏著哲学史、ボーウェン氏著近世哲学を用ひ専ら講義を以て授るものとす

#### 第三 社会学

哲学の主義に協合する社会組織の状況の稍<緊要なるものを十分に曉知せしむべき概旨を講授す

参考書はスペンセル氏著社会学モルガン氏著古代社会論を以てし専ら講義を用ひて教導するものとす

#### 近世哲学（第三年）

欧州近世哲学者中最も著名なる三氏の哲学を一層細密に講ず固より始終諸哲学科の説と相比較し以て其理を明晰ならしむ三氏とはカント、ヘーゲル、スペンセルにして蓋し其哲学の現時の問題に最も緊切なる関係を有するものなるが故に乃ち選択するなり

教科書はカント氏著純理論、ワレーズ氏著ヘーゲル氏論理学、スペンセル氏著心理学第二巻、ミル氏著ハミルトン氏哲学及ヒューム氏著人性論とし且講義も亦之を授く

#### 第一 心理学（第四年）

本年に於ては漸く進て高等なる心理学を学ばしめ其他人類と下等動物との心力の比較、大古と開明時代間の人心の変遷、動物及人類表情上の言語及用智上の言語、及修文の変遷等の諸題を研究せしむ

教科書

ダルウキン氏著生物原始論、ダルウキン氏著人類原始論、ダルウキン氏著情緒発頭論、リュイス氏著哲学史、タイロル氏著大古人類史、ルーボック氏著開化起原論、レッケー氏著欧土明理説、スペンセル氏著万物開進論、スペンセル氏著心理学、フキスク氏著万有哲学、スペンセル氏著新論文集、ミル氏著論文集等とす

#### 第二 道義学及審美学

道義学に於ては近世専ら規画する道徳を学術的理論に據りて論究し正明なる道徳教を事理上より推定せんとする論理の確實なるかを考究するものとす又審美学に於ては各般の美術の妙趣を精確に鑑定するの基本たる批評の真理を細論するものとす

教科書はシドクニック氏著道義学を用ひ兼て講義を授く而してカルテルウッド、ベントム及スペンセル諸氏の所著に係る道義学書を参考とす

〈資料4〉 東大哲学科講義題目一覧（明治28–昭和17年度）

〔注意〕

- ・本一覧は1895（明治28）年度から1942（昭和17）年度までの東大哲学科の講義題目一覧を人物別に編集したものである。
- ・『哲学雑誌』の彙報をもとに、『帝国大学一覧』および『東京帝国大学一覧』と照合しつつ作成した。
- ・原本に見られる誤植・誤記等は可能なかぎり修正した。修正箇所は〔 〕で示している。
- ・1920（大正9）年までは学年は秋学期始まりであるため、例えば1910年の講義題目は1910年9月から1911年7月までの1年間の題目を示している。1921（大正10）年以降は春学期始まりに移行するため、例えば1930年の題目は1930年4月から1931年3月までの題目である。
- ・1895（明治28）年から1903（明治36）年までの題目は、文章記述をもとに再構成したため、特に不十分である。

○ ケーベル

年度	和暦	講義題目
1895	明治28	哲学概論（例年と大差なし）
1895	明治28	哲学演習 Schopenhauer, Parerga and Paralipomena（その後はカント『判断力批判』）
1895	明治28	哲学史講義（第二学期にギリシア哲学より開始）
1895	明治28	哲学史講義（二年級。カント）
1895	明治28	哲学史講義（三年級。カント後哲学。課外）
1895	明治28	ギリシア語（有志のために科外に一時間）
1896	明治29	哲学概論（前学年と大差なし）
1896	明治29	哲学史講義（前学年と大差なし）
1896	明治29	哲学演習 ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』（その後はヘーゲル講習）
1896	明治29	シェリング哲学講義
1896	明治29	ギリシア語
1897	明治30	哲学概論（前学年と大差なし）
1897	明治30	哲学史講義（前学年と大差なし）
1897	明治30	哲学演習（三年級） Schopenhauer, Parerga and Paralipomena
1897	明治30	ギリシア語
1898	明治31	哲学概論（例年と同じ）
1898	明治31	哲学史（例年と同じ）
1898	明治31	美学（例年と同じ）
1898	明治31	哲学演習（三年級）ヘーゲル哲学の講述
1898	明治31	哲学演習（三年級）ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』の会読
1898	明治31	哲学演習（三年級）哲学史の演習（学生の発表）
1899	明治32	哲学概論
1899	明治32	美学

1899	明治 32	芸術史
1899	明治 32	哲学演習（三年級） カント『実践理性批判』の輪読
1899	明治 32	哲学演習（三年級） ヘーゲルの系統に関する講義
1899	明治 32	哲学演習（三年級） 西洋哲学史の演習（学生の発表）
1899	明治 32	ギリシア語
1900	明治 33	哲学概論（一年生）
1900	明治 33	哲学史（二年生）
1900	明治 33	哲学演習（哲学史の復習）
1900	明治 33	哲学演習（学生の発表）
1900	明治 33	哲学演習（種々の世界観及其宗教及道德上の価値についての講述）
1901	明治 34	哲学概論
1901	明治 34	西洋哲学史
1901	明治 34	中世哲学一般
1901	明治 34	ヘーゲルの学説についての特殊講義
1901	明治 34	哲学演習（前学年と同じ）
1902	明治 35	哲学概論
1902	明治 35	西洋哲学史
1902	明治 35	哲学演習 ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』
1902	明治 35	ミトロギー（前学年より続講）
1903	明治 36	哲学演習 ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』第三卷（前学年の続き）
1903	明治 36	哲学概論
1903	明治 36	哲学史
1903	明治 36	ヘーゲル論理学に関する特殊講義
1904	明治 37	History of the Philosophy of the 19th Century in Germany.
1904	明治 37	Hegel's Phaenomenology, Logic and Philosophy of mind.
1904	明治 37	Philosophical Propaede[u]tics.
1905	明治 38	希臘哲学史
1905	明治 38	ヘーゲル以後の哲学史
1905	明治 38	ヘーゲルの哲学
1905	明治 38	基督教発達史（十月末に開講予定）
1906	明治 39	西洋哲学史（中世哲学よりカント迄）
1906	明治 39	ヘーゲルの絶対精神哲学
1906	明治 39	基督教発達史
1906	明治 39	希臘語（上下両級）
1907	明治 40	Philosophical Propa[e]deutics and Introduction to Philosophy（哲学概論）

1907	明治 40	History of Philosophy
1907	明治 40	Philosophy and History of Christianity
1908	明治 41	History of ancient Philosophy (Greek and Roman)
1908	明治 41	History of Philosophy (From Kant till Nowadays)
1908	明治 41	Mysticism and Oculism in the 19th cent.
1909	明治 42	History of Med[ie]val Philosophy
1909	明治 42	Philosophy of 19 C. (The time after Hegel)
1909	明治 42	On Goethe's Faust
1909	明治 42	希臘語 for advanced.
1909	明治 42	希臘語 for Post graduate.
1909	明治 42	Introduction to Philos[o]p[h]y
1910	明治 43	Kant Philosophy
1910	明治 43	Gree[k] Philosophy
1910	明治 43	General Modern Western Philosophy
1911	明治 44	Philosophical Propedeutics (Introduction to philosophy.)
1911	明治 44	History of Mediaeval Philosophy.
1911	明治 44	Hegel's P[h]enomenology.
1911	明治 44	The "Poetics" of Aristotle & Lessing's [L]aokoon.
1911	明治 44	Greek. Reading of Platon's Kriton & Homer.
1911	明治 44	Greek. Re[a]ding of Theakritos
1911	明治 44	Horatius (Carmina.)
1912	大正元	Philosophie des Altertums
1912	大正元	Philosophie der nouern Ze[i]t
1912	大正元	Griechisch für Vorgeschritten Horatius. Ars Poetica.
1912	大正元	Boileau. Art Poetique.
1912	大正元	Die typischen generellen Standpunkt in der Meta[physik] und Religion
1912	大正元	Schillers philosophische Lyrik
1913	大正 2	Philosophic[a]l Propaedeutics (Introduction to Philosophy) Connected with a brief History of occidental Philosophy from Antiquity to present times (For Beginners)
1913	大正 2	Kant (with special examination of his smaller treatises) and Postkantian philosophy
1913	大正 2	History of Christianity
1913	大正 2	Schopenhauer "Welt als Wille [u]nd Vorstellung" Parerga (reading and interpretation of selected chapters)
1913	大正 2	Lessing as poet, critic and philosopher, and reading of his "Nathan der Weise"
1913	大正 2	Reading of Aesch[y]lus' "Prometheus" and Homer's "Odyssee" (for advanced students of Greek)
1913	大正 2	Reading of Virgil's "Buc[o]lica" and Ovidius' "Metamorphose" (For advanced)

○ 井上哲次郎

年度	和暦	講義題目
1895	明治 28	東洋哲学 原始仏教史（釈迦伝→教授の病気のため、春学期は休講になる）
1895	明治 28	哲学講義（前数学年中によろやく純正哲学、理論的哲学、実践的哲学が終わる。今年 は宗教哲学の講義。その初めにカント批評を行う）
1896	明治 29	原始仏教史（釈迦伝）
1896	明治 29	哲学講義（哲学の概念の分析）
1898	明治 31	哲学（三年級。自身の哲学体系、現象即実在論の講述）
1898	明治 31	東洋哲学史（日本儒教史の続き。今は中江藤樹）
1899	明治 32	哲学講義（実践哲学の概要。倫理学・宗教学・政治学等、実践に関する科学の哲学的 基礎を論究する）
1899	明治 32	東洋哲学史（陽明学派。既に中江藤樹、熊沢蕃山が終わり、大塩中斎、山鹿素行に及 ぼうとしている）
1900	明治 33	哲学（三年生） 実践哲学の概要（前学年より継続）
1900	明治 33	東洋哲学史（前学年に本邦における姚江派の講述が終わる。今学年は古学派）
1901	明治 34	実践哲学
1901	明治 34	東洋哲学 日本古学派の哲学（堀川派の学説が終わって護園派に入るところ）
1902	明治 35	実践哲学
1902	明治 35	東洋哲学 朱子学派の哲学
1903	明治 36	実践哲学（前学年の続き）
1903	明治 36	東洋哲学 朱子学派の哲学（前学年の続き。雨森芳洲から）
1904	明治 37	純正哲学（序論および意識論）
1904	明治 37	東洋哲学史
1905	明治 38	東洋哲学（武士道の歴史的及理論的研究）
1905	明治 38	純正哲学（前学年の続き。思惟論に入り、認識論に移る予定）
1906	明治 39	純正哲学（現象即実在論、前学年の続き）
1906	明治 39	東洋哲学史（武士道の歴史的及び理論的研究、前学年の続き）
1907	明治 40	現象即実在論
1907	明治 40	武士道の歴史的及理論的研究
1908	明治 41	東洋哲学史（武士道とストイシズム）
1908	明治 41	哲学概論
1909	明治 42	東洋哲学概論
1909	明治 42	哲学（現象即実在論）
1910	明治 43	哲学概論
1910	明治 43	東洋哲学史概論
1911	明治 44	哲学（人世と世界）
1911	明治 44	東洋哲学（四聖の研究一 主として国民道徳二）

1912	大正元	哲学概論
1912	大正元	西洋哲学史概説
1913	大正2	東洋哲学史
1913	大正2	哲学（人生と世界）
1914	大正3	東洋哲学史概説
1914	大正3	生命の哲学
1915	大正4	東洋哲学史（主として日本道德史）
1915	大正4	哲学概説
1916	大正5	哲学概論（一時間は生命の哲学）
1916	大正5	東洋哲学史概説
1917	大正6	哲学概論
1917	大正6	日本道德史
1918	大正7	哲学概論
1918	大正7	東洋哲学史概説
1919	大正8	東洋哲学史概説
1919	大正8	国民道德と外来思想
1920	大正9	哲学概論
1920	大正9	東洋哲学史概説
1921	大正10	東洋哲学史概説
1921	大正10	哲学概論
1922	大正11	哲学概論

○ 桑木巖翼

年度	和暦	講義題目
1899	明治32	論理学講義（論理学の概念、アリストテレス以来の論理学説史）
1900	明治33	認識論
1901	明治34	論理学（ギリシア以来の学説史）
1902	明治35	認識論及カントの論理学
1903	明治36	論理学一般
1903	明治36	カント純粋理性批判の講読
1904	明治37	哲学概論
1914	大正3	哲学概論
1914	大正3	カント以後哲学史
1914	大正3	カント研究（演習）
1915	大正4	西洋哲学史概説

1915	大正 4	知識哲学の諸問題
1915	大正 4	カント研究（演習）
1916	大正 5	西洋哲学史概説
1916	大正 5	十九世紀後半期の独逸哲学
1916	大正 5	カント研究（演習）
1917	大正 6	西洋哲学史概説
1917	大正 6	判断論
1917	大正 6	カント研究（演習）
1918	大正 7	西洋哲学史概説
1918	大正 7	十九世紀哲学
1918	大正 7	カント哲学諸問題研究（演習）
1919	大正 8	西洋哲学史概説（第一部）
1919	大正 8	十九世紀哲学及演習
1920	大正 9	西洋哲学史概説
1920	大正 9	十九世紀哲学 付演習
1921	大正 10	西洋哲学史概説
1921	大正 10	十九世紀哲学（ヘーゲル）付演習
1922	大正 11	西洋哲学史概説
1922	大正 11	十九世紀哲学史
1922	大正 11	哲学演習（カント評論研究）
1923	大正 12	哲学概論
1923	大正 12	西洋哲学史概説
1923	大正 12	演習（カント「判断力批判」）
1924	大正 13	哲学概論
1924	大正 13	西洋哲学史概説
1924	大正 13	哲学演習
1925	大正 14	哲学概論（形而上学の批評）
1925	大正 14	西洋哲学史概説（第二部）
1925	大正 14	Hegel; Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse.（演習）
1926	大正 15	哲学概論（知識哲学の問題）
1926	大正 15	西洋哲学史概説（第二部）
1926	大正 15	Hegel; Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse（演習。欧州出張のため、秋学期は矢崎美盛が引き継ぐ）
1927	昭和 2	哲学概論
1927	昭和 2	西洋哲学史概説
1927	昭和 2	哲学演習

1928	昭和 3	哲学概論
1928	昭和 3	知識哲学の諸問題
1928	昭和 3	演習 Kant, Kritik der Urteilkraft.
1929	昭和 4	哲学概論
1929	昭和 4	十九世紀独逸哲学（自フィヒテ至ヘーゲル）
1929	昭和 4	哲学演習（用書 Kant, Kritik der reinen Vernunft. Kant, Prolegomena）
1930	昭和 5	西洋哲学史概説（第二部） 十月開講
1930	昭和 5	哲学演習 Hegel, Enzyklopädie
1931	昭和 6	西洋哲学史概説（第二部）
1931	昭和 6	ヘーゲル
1931	昭和 6	哲学演習 Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse. (I. Wissenschaft d. Logik)
1932	昭和 7	哲学概論
1932	昭和 7	十九世紀哲学（ヘーゲル以後）
1932	昭和 7	哲学演習 Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse.
1933	昭和 8	哲学概論
1933	昭和 8	主観主義
1933	昭和 8	哲学演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft.
1933	昭和 8	倫理学演習
1934	昭和 9	哲学概論
1934	昭和 9	論理学の諸問題
1934	昭和 9	哲学演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft.

○ 波多野精一

年度	和暦	講義題目
1908	明治 41	宗教哲学演習（前年の続き）
1909	明治 42	宗教学演習（テツアルタメンツェル哲学読本を用ふ）
1910	明治 43	宗教哲学演習（カントの Prolegomena）
1911	明治 44	宗教哲学
1912	大正元	宗教哲学（オイケン「宗教の真理内容」の演習）
1913	大正 2	近世宗教哲学史
1914	大正 3	希臘哲学史
1915	大正 4	希臘哲学史（前学年の続き）
1916	大正 5	中世哲学史
1917	大正 6	希臘哲学史（ソクラテス迄）



○ 今福忍

年度	和暦	講義題目
1911	明治 44	形式的論理学一般 付 近世論理学的解説
1912	大正元	形式的論理学一般 付 近世論理学的解説
1913	大正 2	形式的論理学一般 付 近世論理学的解説
1914	大正 3	形式論理学一般
1915	大正 4	形式的論理学一般 付 論弁法大要
1916	大正 5	論理学一般 付 論弁法の概要
1917	大正 6	輓近論理学原理
1918	大正 7	輓近論理学の原理 (das emotionale Denken の研究を中心として)
1919	大正 8	輓近論理学原理 (理知的思惟と情緒的思惟の研究)
1920	大正 9	輓近論理原理 (情緒的思惟の研究)
1920	大正 9	研究法梗概
1921	大正 10	否定の研究
1921	大正 10	研究法梗概
1922	大正 11	輓近論理学一般
1923	大正 12	輓近論理学一般 付 科学的研究法 (震災で死亡したため、秋学期は授業できず)

○ 紀平正美

年度	和暦	講義題目
1911	明治 44	認識論
1912	大正元	前年の続き、本論科学的認識
1912	大正元	カントの「純粹理性批判」梗概
1913	大正 2	認識論及哲学的認識
1913	大正 2	認識論略史
1914	大正 3	認識論一般
1915	大正 4	認識論一般
1916	大正 5	認識論一般
1916	大正 5	範疇論
1917	大正 6	認識論一般
1917	大正 6	範疇論 (前学年続)
1918	大正 7	認識論一般
1918	大正 7	範疇論 (特に自我活動の範疇)
1919	大正 8	範疇論

1920	大正 9	範疇論続き 特に行の範疇
1921	大正 10	行の哲学（宗教的方法より）
1922	大正 11	経験の組織としての論理学
1923	大正 12	経験の組織としての論理学（前学年の続き）
1924	大正 13	経験組織としての論理学
1925	大正 14	経験組織としての論理学
1926	大正 15	経験組織としての論理学
1927	昭和 2	経験組織としての論理学（前学年の続）
1928	昭和 3	講義 Hegel, Ph[ä]nomenologie des Geistes.
1929	昭和 4	ヘーゲル精神現象論
1930	昭和 5	ヘーゲル精神現象論講義
1931	昭和 6	論理学一般
1932	昭和 7	一般論理学
1933	昭和 8	一般論理学

○ 得能文

年度	和暦	講義題目
1915	大正 4	近代哲学思潮
1916	大正 5	現代の哲学（前学年の続き）
1917	大正 6	現代の哲学（フッサールの現象学を中心として）
1918	大正 7	現代の哲学
1919	大正 8	現代の哲学
1920	大正 9	現代の哲学（先験的心理学及現象学の諸問題）
1921	大正 10	現代の哲学（フッサール、リップス、ナトルプ）
1922	大正 11	現代の哲学（「ナトルプ」の続きより「フッサール」に移る）
1923	大正 12	[現代の哲学]
1924	大正 13	現代の哲学一般
1925	大正 14	現代の哲学
1926	大正 15	現代の哲学（Brentano u.s.w.）

○ 大島正徳

年度	和暦	講義題目
1912	大正元	演習
1913	大正 2	演習（ベルグソン「時間と自由意志」）

1914	大正 3	カント実践理性批判 (演習)
1915	大正 4	ジェームス氏プラグマチズム演習
1916	大正 5	ヒュームの哲学演習
1917	大正 6	デカルト演習
1917	大正 6	経験派哲学 (英国)
1918	大正 7	哲学演習 Dew[e]y, Ess[a]y on Experimental Logic
1918	大正 7	経験派哲学 (続き)
1919	大正 8	哲学演習
1920	大正 9	哲学演習 New Realism
1921	大正 10	根本経験論 (James; Radical Empiricism)
1922	大正 11	経験派の哲学
1922	大正 11	演習 Critical Realism
1923	大正 12	英米哲学
1923	大正 12	Holt. Concept of Consciousness 哲学演習
1924	大正 13	英米の哲学
1924	大正 13	哲学演習 (Bos[a]nquet Contemporary Philosophies)
1925	大正 14	米国の哲学
1925	大正 14	Russell; Analysis of Mind. (演習)
1926	大正 15	Creative Intelligence (演習)
1927	昭和 2	哲学演習 (New Realism)
1928	昭和 3	英米現代哲学
1928	昭和 3	演習 Essays in Critical Realism.
1929	昭和 4	英米の哲学
1929	昭和 4	哲学演習 (Locke, Essay concerning Human Understanding)
1930	昭和 5	英米の哲学
1930	昭和 5	哲学演習 Locke, Essay concerning Human Understanding
1931	昭和 6	英米哲学
1931	昭和 6	哲学演習 Berkeley, Principle of Human Knowledge.
1932	昭和 7	英米の哲学 (「ロイス」を中心として)
1932	昭和 7	哲学演習 Santayana, Realm of Matter.
1933	昭和 8	哲学演習 Hume, Enquiry concerning Human Understanding.
1933	昭和 8	英米の哲学
1934	昭和 9	英米の哲学
1934	昭和 9	哲学演習 J. S. Mill, System of Logic.
1935	昭和 10	英米の哲学講義

1935	昭和 10	哲学演習 Berkeley, The Principles of Human Knowledge.
1936	昭和 11	英米の哲学
1936	昭和 11	哲学演習 W. James. Radical Empiricism.
1937	昭和 12	英米の哲学
1937	昭和 12	演習 Sellars; Principle and Problem of Philosophy
1938	昭和 13	英米の哲学
1938	昭和 13	演習 J. B. Pratt, Personal Realism.
1939	昭和 14	英米哲学
1939	昭和 14	演習 Locke, An Essay concerning Human Understanding.
1940	昭和 15	米国の実在論
1940	昭和 15	演習 Locke, An Essay concerning Human Understanding.

○ 石原謙

年度	和暦	講義題目
1918	大正 7	希臘哲学史
1919	大正 8	希臘哲学史 (アリストテレス以後)
1920	大正 9	希臘哲学史
1923	大正 12	ギリシヤ哲学
1941	昭和 16	アウグスティヌスと其思想
1942	昭和 17	アウグスティヌスの哲学 (学期の途中で武田信一が引き継ぐ)

○ 伊藤吉之助

年度	和暦	講義題目
1923	大正 12	新カント学派の発展
1924	大正 13	新カント学派の発展 (前学年より続講)
1924	大正 13	哲学演習
1925	大正 14	対象論理学の発展
1925	大正 14	Lotze; Logik (演習)
1926	大正 15	対象論理学の発展
1926	大正 15	Kant; Kritik der reinen Vernunft (演習)
1927	昭和 2	先験的論理学
1927	昭和 2	哲学演習 (カント純理批判)
1927	昭和 2	哲学演習 (ラスク判断論)
1928	昭和 3	西洋哲学史概説 (第二部)

1928	昭和 3	独逸学派の哲学
1928	昭和 3	演習 Husserl, Ideen zu einer reinen Ph[ä]nomenologie u. phän. Philos.
1929	昭和 4	西洋哲学史概説 (第二部)
1929	昭和 4	独逸学派哲学の諸問題
1929	昭和 4	哲学演習 (用書 Husserl, Ideen)
1930	昭和 5	哲学概論
1930	昭和 5	同一哲学
1930	昭和 5	哲学演習 Husserl, Formale und transzendente Logik
1931	昭和 6	哲学概論
1931	昭和 6	現代哲学の諸問題
1931	昭和 6	哲学演習 M. Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik.
1932	昭和 7	西洋哲学史概説第二部
1932	昭和 7	現代哲学に於ける超越の問題
1932	昭和 7	哲学演習 M. Heidegger, Sein und Zeit.
1933	昭和 8	西洋哲学史概説第二部
1933	昭和 8	現代哲学に於ける超越の問題
1933	昭和 8	哲学演習 K. Jaspers, Die geistige Situation der Zeit.
1934	昭和 9	西洋哲学史概説第二部
1934	昭和 9	論理的超越
1934	昭和 9	哲学演習 Heidegger, Kant und das Problem der Mataphysik.
1935	昭和 10	哲学概論
1935	昭和 10	西洋哲学史概説第二部
1935	昭和 10	哲学演習 Schelling, Bruno oder über das göttliche und natürliche Prinzip der Dinge.
1936	昭和 11	哲学概論
1936	昭和 11	十九世紀の哲学
1936	昭和 11	哲学演習 J[as]pers. Vernunft und Existenz.
1937	昭和 12	哲学概論
1937	昭和 12	十九世紀の哲学
1937	昭和 12	演習 Fichte, [D]ie Bestimmung d. Menschen
1938	昭和 13	哲学概論
1938	昭和 13	十九世紀の哲学
1938	昭和 13	演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes.
1939	昭和 14	哲学概論
1939	昭和 14	十九世紀の哲学 (ヘーゲルとキェルケゴール)
1939	昭和 14	演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes.

1940	昭和 15	哲学概論
1940	昭和 15	精神弁証法と現存弁証法
1940	昭和 15	演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes. (VI. Der Geist より)
1941	昭和 16	哲学概論
1941	昭和 16	現実と現存
1941	昭和 16	哲学演習 Hegel, Wissenschaft der Logik.
1942	昭和 17	哲学概論
1942	昭和 17	現実と現存
1942	昭和 17	哲学演習、ヘーゲル関係文献

○ 出隆

年度	和暦	講義題目
1925	大正 14	西洋哲学史概説 (第一部)
1925	大正 14	Spinoza; Ethica. (演習)
1928	昭和 3	西洋哲学史概説 (第一部)
1928	昭和 3	演習 Spinoza, Ethica.
1928	昭和 3	ソクラテス研究 用書 Burnet, Platonis Opera I.
1929	昭和 4	西洋哲学史概説 (第一部)
1929	昭和 4	中世哲学 (九世紀より十二世紀まで)
1929	昭和 4	哲学演[習] (用書 Aristoteles, Über die Seele übersetzt von A. Busse)
1930	昭和 5	西洋哲学史概説 (第一部)
1930	昭和 5	中世哲学 (第九世紀より第十二世紀まで)
1930	昭和 5	哲学演習 Aristoteles, Ethica nicomachea
1931	昭和 6	西洋哲学史概説 (第一部)
1931	昭和 6	ヘレニスト時代の哲学
1931	昭和 6	哲学演習 Aristoteles, Metaphysica
1932	昭和 7	西洋哲学史概説第一部
1932	昭和 7	中世哲学
1932	昭和 7	哲学演習 Aristoteles, Physica.
1933	昭和 8	西洋哲学史概説第一部
1933	昭和 8	Psychê の研究
1933	昭和 8	哲学演習 Aristoteles, De Anima.
1934	昭和 9	西洋哲学史概説第一部
1934	昭和 9	存在の研究
1934	昭和 9	哲学演習 Aristoteles, Metaphysica.

1935	昭和 10	西洋哲学史概説第一部
1935	昭和 10	アリストテレスの人間学
1935	昭和 10	哲学演習 Aristoteles, Metaphysica.
1936	昭和 11	西洋哲学史概説（第一部）
1936	昭和 11	希臘末期の哲学
1936	昭和 11	哲学演習 Plato. Timaeus.
1937	昭和 12	西洋哲学史概説（第一部）
1937	昭和 12	アウグスチヌス其他
1937	昭和 12	演習 Plato's Republic
1938	昭和 13	西洋哲学史概説（第一部）
1938	昭和 13	中世哲学
1938	昭和 13	演習（アリストテレス研究）
1939	昭和 14	西洋哲学史概説第一部
1939	昭和 14	プラトン研究
1939	昭和 14	演習 Aristotle, Organon.
1940	昭和 15	西洋哲学史概説（第一部）
1940	昭和 15	コスモポリスの哲学
1940	昭和 15	演習 アリストテレス「形而上学」
1941	昭和 16	西洋哲学史概説（第一部）
1941	昭和 16	コスモポリテスの哲学
1941	昭和 16	哲学演習 Aristotelis De Anima.
1942	昭和 17	西洋哲学史概説（第一部）
1942	昭和 17	コスモポリテスの哲学
1942	昭和 17	哲学演習 Platonis Republica

○ 池上鎌三

年度	和暦	講義題目
1935	昭和 10	論理学の根本問題
1936	昭和 11	西洋哲学史概説（第二部）
1936	昭和 11	静的論理学基礎論
1937	昭和 12	西洋哲学史概説（第二部）
1937	昭和 12	演習 Ideen zu einer reinen Phänomenologie u. phänomenologischen Philosophie
1937	昭和 12	文化哲学の諸問題
1938	昭和 13	西洋哲学史概説（第二部）
1938	昭和 13	文化哲学の論理

1938	昭和 13	演習 K. Jaspers, Descartes und die Philosophie.
1939	昭和 14	西洋哲学史概説第二部
1939	昭和 14	知識の問題
1939	昭和 14	演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft.
1940	昭和 15	西洋哲学史概説 (第二部)
1940	昭和 15	知識論
1940	昭和 15	演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft.
1941	昭和 16	西洋哲学史概説 (第二部)
1941	昭和 16	知識構造論
1941	昭和 16	哲学演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft
1942	昭和 17	西洋哲学史概説 (第二部)
1942	昭和 17	知識構造論
1942	昭和 17	哲学演習、カント解釈諸論文



## 〈資料5〉人名小事典

石原謙 Ishihara Ken (1882–1976)

明治～昭和期の哲学史家、キリスト教史家。主な研究対象は、新約聖書、原始キリスト教、ギリシア教父、アウグスティヌス、エックハルト、ルター。1882年東京市本郷区（現・文京区本郷）に生まれる。1901年第一高等学校に入学。阿部次郎や岩波茂雄と同級になる。1904年同校を卒業し、同年東京帝国大学文科大学史学科に入学するも、2年次に哲学科に転科し、ケーベルに師事するようになる。1907年哲学科を卒業。卒業論文では、新約聖書『ヨハネによる福音書』のロゴス思想とアレクサンドリアのフィロンの哲学との比較を扱った（この論文は改稿された上で、『哲学雑誌』に「紀元前後に於ける救済問題及ロゴス論」という題で掲載されている）。同年哲学科の大学院に進学する。また、同年春から富士見町教会で波多野精一のロマ書講義に出席し、波多野から個人的に指導を受けるようになっていたが、大学院進学後の秋から、キリスト教の起源に関する波多野の講義を聴講するようになる。1912年学位論文「アレキサンドリアのクレメンスの哲学」を提出するものの、しばらく放置される。1914年シュライエルマッハー『宗教論』の翻訳を刊行。1916年『宗教哲学』（岩波哲学叢書7）を刊行。1917年波多野の後任として早稲田大学文科講師になり、古代・中世哲学史を担当。1918年東京帝国大学文科大学哲学科講師になり、同じく古代・中世哲学史を担当する。1919年東京女子大学講師になり、原始キリスト教史の講義を始める。1921年長らく放置されていた学位論文が審査され、博士号を取得する。これに伴い、東京帝国大学文学部哲学科助教授に就任。同年ドイツ留学に出発し、ハイデルベルク大学で学ぶ。同大学では、神学者ハンス・フォン・シューベルトらの講義や演習に出席する。その後、バーゼル、パリ、オクスフォード、ニューヨークを周遊したが、関東大震災の報を受けて急遽帰国することになる。1923年10月震災で壊滅状態となった横浜港に到着。震災の影響で留守宅の蔵書や論文はすべて焼失していた。同年は秋学期のみ東京帝国大学文学部哲学科で講義を担当するが、東北帝国大学から招聘を受け、翌1924年同大学法文学部哲学第二講座の助教授に転任する。転任を決断した背景には、同じケーベル門下で東北帝国大学教授だった小山鞆絵や阿部次郎の強い勧めもあった。転任直後には同大学の外国人教師ヘリゲルとドイツ神秘主義（特にエックハルト）の研究を始めている。1933年頃からルターの研究を本格的に始め、同年ルター『キリスト者の自由』を翻訳し、岩波文庫に収める。1934年東北帝国大学法文学部長に就任（1937年まで）。1935年岩波書店『大思想文庫』の一冊として『新約聖書』を刊行する。1939年ルター『信仰要義』を翻訳し、岩波文庫に収める。1940年東北帝国大学を辞任（ただし嘱託講師として1943年まで東北帝国大学の授業を担当する）。同年東京女子大学学長に就任し、戦中期における同大学の経営に尽力する。1948年学長を辞任。1952年中世哲学会初代委員長に就任（1963年まで務める）。1973年ハイデルベルク大学名誉神学博士号を得る。他にも著書として『岩波講座哲学 第4巻』所収の「神学史（上・下）」（1933年）、『基督教史』（1934年）、『マルティン・ルターと宗教改革の精神』（1944年）、『中世キ

リスト教研究』(1952年)、『宗教改革者ルターとその周辺』(1967年)、『キリスト教の源流』(1972年)、『キリスト教の展開』(1972年)等がある。兄は理論物理学者・歌人の石原純。

出隆 Ide Takashi (1892–1980)

大正・昭和期の哲学者。専門は古代ギリシア哲学。1892年岡山県苫田郡津山町(現・津山市)に生まれる。津山中学校を経て、1913年第六高等学校第一部乙類卒業。同年東京帝国大学文科大学文学科に入学し、言語学を専攻する。この年にケーベルの哲学概論を受講している。1914年哲学科に転科し、井上哲次郎、桑木巖翼、波多野精一の授業を受けるようになる。1917年哲学科卒業。卒業論文は「スピノザ哲学に於ける二元性と認識」であった。これは「スピノザ哲学に於ける認識問題」という題で『哲学雑誌』に掲載されている。同年大学院に進学する。大学院の研究課題は「近世認識論史」で、主にスピノザ、カント、ヘーゲルの認識論を研究する予定であった。1919年友人の大村書店主から依頼されて、デカルト『方法叙説』『省察』『哲学原理』(第1部のみ)の翻訳を『方法・省察・原理』(大村書店)として出版。この頃から古代・中世哲学研究の必要性を感じ始める。1920年にはヴィンデルバント『プレルーディエン(前奏曲)』の巻頭論文「哲学とは何か」の翻訳を『哲学とは何ぞや』(大村書店)として出版している。1921年東洋大学教授と東京女子大学教授に就任。同年『哲学以前』(大村書店)を刊行し、ベストセラーとなる。1924年『神の思ひ』(大村書店)を出版。同年石原謙の後を受けて東京帝国大学文学部助教授となり、西洋哲学史概説第一部(古代・中世哲学史)と哲学演習を担当するようになる。最初の演習では、スピノザ『エチカ』の講読をした。1926年英オクスフォード大学に留学し、デヴィッド・ロスやハロルド・ジョアキムに学ぶ。パリ、ベルリンを経て、1927年シベリア経由で帰国。翌1928年から、東大哲学科の特殊講義では、留学中に取り入れたバーネットやテイラーの研究を精力的に紹介しながら、プラトン、アリストテレス、古代末期、アウグスティヌス、中世哲学を講じるようになる。哲学演習では、アリストテレス『デ・アニマ』『ニコマコス倫理学』『形而上学』『自然学』『オルガノン』、プラトン『ティマイオス』『国家』を次々と講読していった。また、1928年には高野山大学教授となり、以後11年間毎年夏に講義を通うようになる。1935年東京帝国大学文学部哲学科教授に昇進。1940年から特殊講義で「コスモポリテスの哲学」を講じるようになり、1941年には随筆「「哲学」を殺すもの」を『哲学雑誌』に発表している。この頃から古代ギリシアに仮託しつつ、当時の国内外の情勢に反発した文章を書くようになる。戦後「哲学の無力」を自覚し、マルクス主義へと転じて「戦闘的唯物論」を唱えるようになる。それとともに、「知識人」や「講壇哲学」にも嫌気が差し、1948年日本共産党に入党して市民に開かれた哲学を目指すようになる。1951年東京大学文学部教授を辞め、無所属で東京都知事選に立候補するが、落選する。この時、当初は共産党の推薦で立候補するはずだったが、同党内の所感派と国際派の対立のため、推薦は見送られて、無所属で出馬せざるを得なかった。1964年日本共産党から除名される。1980年米寿になる前日に東京都杉並区阿佐ヶ谷の河北病院で死去。著書に『プロチノス エネアデス』(大思想文庫、

岩波書店、1936年）、『空點房雜記』（岩波書店、1939年）、『英国の曲線』（理想社、1939年）、『ギリシアの哲学と政治』（岩波書店、1943年）等があるほか、訳書としてアリストテレス『形而上学』（岩波文庫、1959-1961年）、エピクロス『教説と手紙』（岩崎允胤との共訳、岩波文庫、1959年）等がある。また、『アリストテレス全集』（岩波書店、1968-1973年）の監修を務めた。『出隆著作集』（全8巻+別巻、勁草書房、1963-1973年）も出ている。

#### 伊藤吉之助 Ito Kichinosuke (1885-1961)

明治～昭和期の哲学者。専門はドイツ近現代哲学。1885年山形県酒田市日吉町の雑貨卸商の家に生まれる。荘内中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学文科大学哲学科に入学。同期生には安倍能成、小山鞆絵、宮本和吉らがいた。宮本とは同郷でもあり、のちに阿部次郎と合わせて、「庄内の哲学三羽鳥」と呼ばれるようになる。1909年同大学を卒業。卒業論文は「カントを中心とした空間論」であった。その後、大学院に進学し、1920年から慶應義塾大学派遣留学生としてドイツに留学。ドイツではベルリン大学、ハンブルク大学で学び、とりわけ新カント派のうちマルブルク学派の影響を受けた。また、留学中はハイデガーを家庭教師にし、ドイツ語を習うとともに、アリストテレス『形而上学』の講読をしてもらった。1922年帰国し、同年慶應義塾大学教授に就任。翌1923年から東京帝国大学文学部哲学科講師も務める。1926年同大学哲学科助教授に転任。1930年同教授に昇進した。講義では新カント派や独逸学派（ボルツァーノ、ブレンターノ、フッサール、マイノングラ）を紹介し、哲学演習ではカント『純粹理性批判』やロツツェ『論理学』、ラスク『判断論』のほか、フッサール『イデーニ I』、ハイデガー『存在と時間』、『カントと形而上学の問題』、ヤスパー『現代の精神的状況』等を講読した。特に哲学演習は厳しいことで有名で、担当の学生を教壇に立たせて報告させた上で、伊藤がそれに対して強い口調で質問を浴びせかけ徹底的に吟味するというものだった。1945年の退官後は、翌1946年から北海道大学法文学部の設立に尽力し、1947年同学部長に就任。その後1951年に退任すると、同年から中央大学文学部教授となり、1955-1958年には同学部長を務めた。ドイツ近現代哲学を中心に膨大な文献を渉猟する勉強家であり、かつ国内外の研究に対して徹底的に批評を試みる厳格さも備えていた。だが、その批評の矛先が自身の研究にも向いていたため、なかなか論文を仕上げることができず、書いては消してを繰り返したため、著述がきわめて少ないことでも知られる。著書に『最近の独逸哲学』（理想社、1944年）があるほか、『岩波哲学小辞典』（岩波書店、1930年）の編者も務めた。

#### 井上哲次郎 Inoue Tetsujiro (1855-1944)

明治～昭和前期の哲学者。東大哲学科の初代主任教授。1855年筑前国大宰府の医師の家に生まれる。1862年から中村徳山に師事し、漢籍を学ぶ。1868年から博多の村上研次郎の下で英語を学び、1871年徒歩で長崎に向かい、広運館（のちの長崎英語学校）に入学。1875年2月東京開成学校に入学し、1877年東京大学文学部の第一期生となる。哲学を専攻し、

政治学を兼修した。1880年卒業し、同年より文部省編輯局で東洋哲学史編纂に従事する。その間、『哲学字彙』編纂に携わり、外山正一・矢田部良吉とともに『新体詩抄』を刊行する。1882年東京大学文学部助教授となり、1883年加藤弘之の指示により東洋哲学史の講義をする。1884年ドイツ留学に出発し、ハイデルベルク大学で1年間クーノー・フィッシャーの講義を聴いたほか、ライプツィヒ大学でヴィルヘルム・ヴントの講義に出席した。1887-1890年の間、ベルリン大学付属東洋語学校（Seminar für Orientalische Sprachen）で講師を務める。1890年帰国し、同年帝国大学文科大学教授に就任。これ以降、哲学科で東洋哲学史を担当し、印度哲学（六派哲学から釈迦伝まで）、陽明学派、古学派、朱子学派、武士道、国民道德論を順に講じる。こうした講義は、『釈迦牟尼伝』（1902年）、『日本陽明学派之哲学』（1900年）、『日本古学派之哲学』（1902年）、『日本朱子学派之哲学』（1906年）、『国民道德概論』（1912年）に結実する。また、純正哲学の講義や『哲学雑誌』の論説では、現象即實在論を提唱した。他方、1891年文部省の依頼で教育勅語の解説書『勅語衍義』を刊行し、「御用学者」のレッテルを貼られるようになる。また、1893年『教育と宗教の衝突』を刊行し、国体に反するとしてキリスト教を排撃。この論争は仏教批判にまで及び、最終的に既存の宗教から一切の迷信を取り去った「倫理的理想教」を提唱するに至る。1897-1904年文科大学学長、1916年から哲学会会長を務める。1923年東京帝国大学教授を退任し、名誉教授となる。同年大東文化学院教授に就任し、1925-1926年大東文化学院総長を務める。1926年『我が国体と国民道德』をめぐる、筆禍事件が起こる。1944年肺炎と尿毒症のため死去。

今福忍 Imafuku Shinobu (1873-1923)

明治・大正期の論理学者。神奈川県海老名市の名家、今福家に生まれる。帝国大学文科大学哲学科で論理学を学んだ後、早稲田大学や浄土宗大学で形式論理学を教え、それをもとに形式論理学の教科書である『最新論理学要義』（1908年）を刊行。1911年度から東京帝国大学でも同書を用いて形式論理学を講じたほか、ドイツの最新の論理学も紹介した。1923年の関東大震災の際、大磯の別荘で被災。家屋倒壊に巻き込まれて死亡する。

大島正徳 Oshima Masanori (1880-1947)

明治～昭和前期の哲学者、教育家。1880年神奈川県高座郡海老名村（現・海老名市）に生まれる。札幌農学校第一期生としてクラークの薫陶を受けたクリスチャンの叔父、大島正健の助言により、1895年同志社予備校に入学。翌年同尋常中学校4年に編入し、1898年卒業。同年第一高等学校に入学する。在学中に一高寮歌「全寮々歌」を作詞する（作曲は島崎赤太郎）。1901年卒業し、同年東京帝国大学文科大学哲学科に入学。1904年卒業後、大学院に進学して英米哲学を研究する。1909年満期退学した後、1911年から東洋大学で哲学概論と論理学を担当。1912年東京帝国大学文科大学哲学科講師に着任し、1913年から第一高等学校で修身科の授業も担当する。1916年哲学科助教授、第一高等学校教授に昇進した。哲学科の授業では、英米哲学の講義や哲学演習を担当。講義ではイギリス経験論とプラグマティズム

ムを紹介し、演習ではロック、パークリー、ヒューム、ベルクソン、ジェームズ、デューイなどを講読した。1925年4月東京市学務局（のちの教育局）長に就任。同年9月24日付で哲学科教授に昇任するが、翌25日「依願免本官」の扱いで退官している。これ以降は、講師として1940年度まで哲学科の授業を担当することになる。1927年東洋大学教授に就任し、近世西洋哲学史の講義などを担当し始める。その一方で、教育局長を辞任し、1928年第一回普通選挙に立候補し、落選する。同年から帝国教育会委員を務め、1931年米デンバーでの第4回世界教育会議に出席し、1932年日本での世界教育会議開催を打診される。1933年アイルランドのダブリンでの第5回世界教育会議、1935年英オクスフォードでの第6回世界教育会議に出席。1936年第7回世界教育会議の事務総長に就任し、18カ月間に及ぶ準備活動を始める。そしてついに1937年8月2日に東京帝国大学で第7回世界教育会議を開催する。同会議は安田講堂を主会場とし、海外から約900名の参加者を招いて、6日間にわたって行われた。その後、かねてより世界教育会議を通してフィリピンの教育関係者と交流があったことから、1942-1943年比島調査委員会の委員となり、フィリピンの現地調査に協力する。戦後は1946年GHQ占領下で教育刷新委員会の委員となる。翌1947年肝臓がんのため、東大病院で死去する。著書に『経験派の哲学』（1923年）、『近世英国哲学史』（1928年）、『現代哲学概観』（1931年）、『ヒューム人性論』（1935年）、『ロック』（1938年）、『現代アメリカ哲学』（1946年）等がある。

#### 大塚保治 Otsuka Yasuji (1868-1931)

明治～昭和前期の美学者。旧姓・小屋。1868年群馬に生まれる。1891年帝国大学文科大学卒業。1896年から4年間ヨーロッパに留学する。1900年帰国し、同年東京帝国大学文科大学美学講座教授に就任。以後、1929年の退官まで、美学概論や近世欧州文芸史を講じ、日本に美学理論を導入すると同時に、ボードレール、オスカー・ワイルド、ヴェルレーヌといった19世紀ヨーロッパ文学を紹介した。特に、近世欧州文芸史の講義は名講義と名高く、当時学生の人気が高かった。生前の著述はきわめて少ないが、死後に講義録がまとめられて『大塚博士講義集』（全2巻、1933-1936年）として出版されている。妻は歌人の大塚楠緒子。結婚した際に大塚家の婿養子になっている。

#### 大西祝 Onishi Hajime (1864-1899)

明治期の哲学者。号は操山。1864年備前国岡山西田町（現・岡山市北区）の岡山藩士の子として生まれる。両親は熱心なユニテリアン信徒であった。1877年同志社英学校普通科に入学。中島力造、元良勇次郎、徳富蘇峰、小崎弘道らと知り合う。翌1878年新島襄から洗礼を受ける。1881年普通科を卒業し、同神学科に進む。1884年神学科を卒業し、翌1885年に東京大学予備門第三年次に編入。同年に東京大学文学部哲学科に進学する。大学では主に外山正一とブッセに学ぶ。学友には清沢満之、松本亦太郎、大塚保治らがいた。1889年哲学科を卒業し、同年大学院に進学する。翌1890年から井上哲次郎が指導教員になる。この

頃に大学院の修了論文「良心起原論」を執筆している。1891年大学院を修了するが、結局「良心起原論」は大学に提出されずに終わる。これは、キリスト教排撃の論陣を張っていた井上との確執が一因と見られる。同年東京専門学校（現・早稲田大学）講師に就任し、倫理学、論理学、西洋哲学史等を講じ始める。1893年「当今の衝突論」を『教育時論』に発表し、井上哲次郎『教育と宗教の衝突』（敬業社、1893年）に端を発する論争に加わる。1895年キリスト教の総合雑誌『六合雑誌』の編集委員になる。1897年姉崎正治らと丁酉懇話会（のちに丁酉倫理会）を設立。同年東京高等師範学校講師に就任する。1898年ヨーロッパ留学に出発し、同年4月からイエーナ大学でルドルフ・オイケンやオットー・リープマンに学ぶが、盲腸炎を患う。同年11月にはライプツィヒ大学に転じ、ヴィルヘルム・ヴントやヨハネス・フォルケルトの講義を聴講する。だが翌1899年2月にインフルエンザに罹り、肺炎を併発。さらに同年5月に神経衰弱が悪化し、静養を余儀なくされる。翌6月には京都帝国大学文科大学長就任が内定され、ヨーロッパでの調査・研究が命じられるが、病状が悪化したため、同年中に帰国する。1900年文学博士号を授与されるものの、療養先の岡山で急性腹膜炎を起こして死去する。草稿状態で残された「良心起原論」や東京専門学校での講義録、学術雑誌に発表した論文は、死後にまとめられて『大西博士全集』（全7巻、警醒社、1903-1904年）として刊行されている。また、近年小坂国継編『大西祝選集』（全3巻、岩波文庫、2013-2014年）も出ている。

紀平正美 Kihira Tadayoshi (1874-1949)

明治～昭和前期の哲学者。1874年三重県安濃郡（現・安芸郡）に生まれる。1894年三重中学校卒業、1897年第四高等学校卒業。第四高等学校では、当時講師だった西田幾多郎からドイツ語を学ぶ。1900年東京帝国大学文科大学哲学科を卒業し、大学院に進学する。大学院ではカントやヘーゲルの認識論、とりわけヘーゲル論理学の研究に従事する。日本で初めてヘーゲルをドイツ語原文で読んだ世代に属し、まもなくヘーゲル研究の第一人者になる。1905-1906年には『哲学雑誌』で小田切良太郎とともに、ヘーゲル『小論理学』の一部（第1節～第126節の途中）をドイツ語原文から訳している。1911年から東京帝国大学文科大学哲学科の講師となり、「認識論」や「範疇論」の講義を担当。これが『哲学叢書』シリーズの一冊として刊行される『認識論』（1915年）に結実する。これ以後、東京帝国大学での講師は23年間に及び、国学院や明治大学でも長く教えることになる。ところが、1919年に学習院教授に着任し、独自の哲学体系を著した『行の哲学』（1923年）や『三願転入の論理』（1927年）を刊行した頃から、ヘーゲルの弁証法と儒教・仏教の思想を折衷し、国民道徳論につなげるようになる。さらに、1932年国民精神文化研究所の所員となり、日本主義の理論的指導者の一人になる。1943年には『皇国史観』を刊行する一方で、同年国民精神文化研究所が教学錬成所に併合されると、所員を退職している。紀平自身は若い頃から眼光が鋭く、弁舌が達者な人物だったようである。

桑木巖翼 Kuwaki Gen'yoku (1874–1946)

明治～昭和前期の哲学者。大正教養主義を代表する人物で、専門はカント哲学。1874年旧加賀藩士の長男として東京・牛込に生まれる。開成中学校、第一高等中学校を経て、1893年帝国大学文科大学哲学科に入学。1896年首席で卒業し、同年大学院に進学する。在学中はケーベルの薫陶を受ける。1898年から東京専門学校講師、第一高等学校教授、東京帝国大学文科大学講師を歴任し、1902年同助教授になる。その間、東京専門学校での講義をもとにした『哲学概論』（1900年）により博士号を取得する。1902年ヴィンデルバント『哲学史』の抄訳を『哲学史要』として刊行（この前年に波多野精一が『西洋哲学史要』を刊行している）。1906年京都帝国大学文科大学教授に着任するが、翌1907年から2年間、ドイツ・フランス・イギリスに留学する。ドイツでは、ベルリン大学でアロイス・リールのカント演習やフリードリヒ・パウルゼンのスピノザ演習に出席したほか、ライプツィヒ大学でヴィルヘルム・ヴントの哲学史講義も聴いている。帰国後、京都帝国大学で西洋哲学史を講じ、フィヒテやヘーゲルの演習を行った。1914年ケーベルの後を受けて、東京帝国大学文科大学教授に着任。以後、1935年の定年退官まで、哲学概論、西洋哲学史、19世紀ドイツ哲学を講じたほか、カントやヘーゲルの演習を行った。1917年に刊行した『カントと現代の哲学』は、出隆や三木清らの世代にとって名著であり、のちの『カント雑考』（1924年）や『フィヒテ 知識学』（1935年）とともに、多くの学生に読まれた。桑木自身は、新カント派の中でも、ヴィンデルバントやリッケルトら西南学派の影響を受け、文化主義の立場を採った。また、オイケンやドイッセン、パウルゼンも好んで読んだ。大正デモクラシー期には、吉野作造が結成した黎明会に入り、文化主義の立場から多くの論説を書いている。1946年貴族院議員に選ばれたが、同年死去した。なお、弟の桑木彥雄は、のちに九州帝国大学教授となった物理学者・科学史家であり、日本人で初めてアインシュタインに会った人物として知られる。また、その子の桑木務は、ハイデガー『存在と時間』（岩波文庫）の翻訳者として有名になる。

ラファエル・フォン・ケーベル Raphael von Koeber (1848–1923)

ドイツ系ロシア人の哲学者。1848年高級官僚の子として、帝政ロシアの古都ニジニー・ノブゴロドに生まれる。1867年モスクワ音楽院に入学し、1872年優秀な成績で卒業するが、生来の内気な性格から音楽家になることを断念する。1873年ドイツに留学し、イエーナ大学とハイデルベルク大学で哲学や文学を学び、博士号を取得する。その後、『人間的自由に関するシェリングの理論』（1880年）、『ハルトマンの哲学体系』（1884年）、『ショーペンハウアーの哲学』（1888年）を刊行する。1893年エドゥアルト・フォン・ハルトマンの推薦で、帝国大学文科大学教師に着任して以来、21年間にわたって哲学を講じた。講義には、初学者向けの哲学概論のほか、古代から近代までの西洋哲学史、カントやヘーゲル、ショーペンハウアーの講読、ギリシア・ローマ古典文学、ドイツ文学などがあつたほか、課外で長年古典ギリシア語を教えた。その間、東京音楽学校でピアノの授業も行った。1914年文科大学

教師を退任し、ドイツに帰国しようとしたが、第一次世界大戦勃発のため帰国できず、その後 9 年間横浜で過ごし死去した。晩年は多くの随筆を書いており、その一部は久保勉訳編『ケーベル博士随筆集』（岩波文庫、1979 年）で読むことができる。ケーベルの教養の深さと人格の高潔さには多くの学生が魅了され、大正教養主義の高まりに決定的な影響を与えた。特に影響を受けた人物としては、波多野精一、深田康算、久保勉、阿部次郎、石原謙らが挙げられる。

小林一郎 Kobayashi Ichiro (1876–1944)

明治～昭和前期の仏教学者。1876 年神奈川県横浜市に生まれる。東京帝国大学文科大学哲学科を卒業後、同大学で論理学を教えたほか、東洋大学、日蓮宗大学、立正大学、中央大学でも教鞭を執った。はじめは西洋哲学を研究し、プラトン哲学の概要とプラトン『国家』の梗概からなる『プラトーン』（1906 年）や、マルクス・アウレリウス『自省録』を解題した『マアカス・アウレリアス冥想録』（1907 年）を刊行したが、のちに小林日薫の影響を受け、仏教学、とりわけ日蓮宗研究に転身した。1914 年法華会を創設し、機関誌『法華』を創刊。その後、法華思想普及のため、多くの著述を残し、各地を巡講した。著書に『日蓮主義概論』（1918 年）、『法華経大講座』（全 13 巻、1935–1936 年）、『日蓮上人遺文大講座』（全 12 巻、1937 年）、『易経大講座』（全 12 巻、1940–1941 年）等がある。

得能文 Tokuno Bun (1866–1945)

明治～昭和前期の哲学者。1866 年富山県吉江村（現・南砺市福光）に生まれる。石川県専門学校（のちの第四高等学校）に入学し、西田幾多郎と同期生になる。同校が第四高等中学校に変わる頃に、西田とともに放校処分になり、ともに帝国大学文科大学哲学科の選科生になった。在学中は井上哲次郎や中島力造、ブッセに学んだ。ケーベル着任直前に金沢に転居したため、ケーベルの聲咳に接することはなかった。その後、第四高等学校講師を経て、哲学館（現・東洋大学）で教鞭を執るようになる。また、1915（大正 4）年度から 12 年間、東京帝国大学で現代哲学の講義を担当している。講義で扱った範囲は広く、オイケン、ベルクソン、ディルタイに始まり、新カント派の西南学派（ヴィンデルバント、リッケルト、ラスク）、マールブルク学派（コーエン、ナトルプ、カッシーラー）、ボルツァーノ、ブレンターノ、フッサール、リップス、マイノング、ウィリアム・ジェームズ、サンタヤーナ、新实在論、ラッセル、クローチェ、ニコライ・ハルトマンと多岐に及んだ。とりわけフッサール現象学の最初期の紹介者としての役割は重要である。概ねそれぞれの著作の梗概を紹介した。そうした紹介の一端は、『最究竟者』（1927 年）、『現今の哲学問題』（1928 年）、『哲学講話』（1930 年）、『真理の追求』（1935 年）に見られる。なお、若い頃は正岡子規の門下であり、晩年の子規と書簡を交わしている。



中島力造 Nakajima Rikizo (1858–1918)

明治・大正期の倫理学者。1858年丹波国福知山藩（現・京都府福知山市）の麩屋の家に生まれる。1871年頃まで藩校惇明館で漢学を学び、神戸、大阪、京都、東京で英語と数学を修める。1878–1879年同志社英学校選科として英語を学ぶ。在学中に新島襄の信任を得て、資産家から経済的援助を受け、アメリカに留学。ウェスタン・リザーブ大学、イエール大学進学科を経て、1888年イエール大学哲学科で博士号を取得。博士論文は「カントの物自体の理論」であり、審査教授はジョージ・トランブル・ラッドだった。1890年帰国し、第一高等中学校（のちの第一高等学校）で倫理と英語の授業を担当する。1891年帝国大学文科大学の倫理学講師に就任。翌1892年同教授になる。以来27年にわたって、古代から近代までの西洋倫理学史や国民理想比較研究を講じた。西洋倫理学史では、とりわけイギリス功利主義のベンサムやミル、イギリス理想主義のトマス・ヒル・グリーンを紹介した。演習ではカント、ヘーゲル、シジウィックの講読を行ったが、自身はドイツ語が苦手であったため、カントやヘーゲルの講読には専ら英訳を用いた。グリーン自我実現説の紹介者として知られるが、晩年にはそれを敷衍し、自身の学説として人格実現説を提唱するようになった。著書に『最近の倫理学書』（富山房、1896年）、『グリーン氏倫理学説』（同文館、1909年）、『スペンサー氏倫理学説』（同文館、1909年）、『英国功利説の研究』（大日本学術協会、1916年）、『最近倫理学説の研究』（岩波書店、1919年）等があるほか、ラッド『知識の哲学 (*Philosophy of Knowledge*)』の抄訳『ラッド氏認識論』（富山房、1898年）を刊行している。

アーネスト・フェノロサ Ernest Fenollosa (1853–1908)

アメリカの哲学者、東洋美術研究家。ハーバード大学で哲学を修め、1874年首席で卒業。在学中はスペンサーの進化論哲学に傾倒し、同大学の「スペンサー・クラブ」の結成に関わった。東京大学で教鞭を執っていた動物学者のエドワード・モースの推薦により、1878年8月に来日し、翌9月から東京大学で哲学、政治学、理財学（経済学）を講じた。哲学の講義ではミルやスペンサーを紹介し、とりわけスペンサーの進化論哲学とヘーゲル哲学の総合を論じた一方で、シュヴェーグラー『哲学史』英訳やボーウェン『近代哲学』を参考にしながら、デカルトからスペンサーに至る近代哲学史を解説した。講義で取り上げる哲学書は専ら英書か英訳であり、カントやヘーゲルも英訳を用いていた。また、カントはエドワード・ケアード、ヘーゲルはウィリアム・ウォーレスの研究書に依拠していた。その後、来日時から続けていた日本美術の収集と研究に重点を置くようになり、1886年8月に東京大学の教師を退任してからは、東洋美術研究家として活動した。1887年には岡倉天心と協力し、東京美術学校（現・東京芸術大学美術学部）を設立。同校で美術史や審美学（美学）を講じ、日本の美術史研究の礎を築いた。1890年帰国し、ボストン美術館東洋部部長に就任。同美術館に1896年まで務めた。その後、短期間ではあるが2度来日したが、1908年の講演旅行中にロンドンで急死した。著書に *An Outline of the History of the Ukiyoye*（『浮世絵の歴史の概要』、1901年）や *Epochs of Chinese and Japanese Art*（『中国美術と日本美術の画期』、1912年）

がある。後者はのちに有賀長雄訳『東亜美術史綱』（上下巻、1921年）が出版される。

#### 深作安文 Fukasaku Yasubumi (1874–1962)

明治～昭和期の倫理学者。専門は水戸学。1874年茨城県に生まれる。1891年東京帝国大学文科大学哲学科に入学。井上哲次郎、中島力造、元良勇次郎、ケーベルに学ぶ。同大学卒業後、『フィヒテ氏倫理学』（育成会、1900年）や『パウルゼン氏実践倫理』（育成会、1903年）を出版。1908年から同大学で倫理学講師を務め、水戸学の道德思想や国体論、国民道德論を講じ始める。1912年倫理学助教授に就任。1926年同教授に昇進し、倫理学第二講座を担当する。1935年退官し、東京商科大学（現・一橋大学）講師となる。昭和前期まで水戸学の権威として活躍し、国語・公民・修身科の学校教育にも影響を与えた。戦時期に刊行された著書には、日本の軍国主義を積極的に擁護する姿勢が見られる。主な著書に、『倫理と国民道德』（弘道館、1916年）、『国民道德要義』（弘道館、1916年）、『我国に於ける国体觀念の発達』（明治出版社、1920年）、『国民道德概説』（同文館、1929年）、『思想と国家』（目黒書店、1930年）、『日本道德要義』（文光社、1933年）、『日本倫理と日本精神』（目黒書店、1937年）、『今日に処するの道』（目黒書店、1937年）、『道の国日本』（東洋図書、1939年）、『水戸学要義』（目黒書店、1940年）、『興国の倫理』（目黒書店、1942年）等がある。

#### ルートヴィヒ・ブッセ Ludwig Busse (1862–1907)

ドイツの哲学者。ブラウンシュヴァイク生まれ。ライプツィヒ大学やベルリン大学で学び、1885年スピノザ哲学の発展史に関する博士論文をベルリン大学に提出し、博士号を取得した。在学中には晩年のヘルマン・ロツツェの講義を聴いたらしい。その後来日し、1887年1月帝国大学文科大学の教師に着任。以後、1892年12月の退任まで、カント以降のドイツ哲学を講じる。とりわけロツツェの哲学を解説することが多かった。なお、講義は英語で行ったが、ドイツ語訛りであったようである。帰国後はケーニヒスベルク大学、ミュンスター大学、ハレ大学の教授を歴任する。著書に『哲学と認識論』（1894年）、『精神と身体、魂と肉体』（1903年）、『近代の哲学者たちの世界観』（1905年）がある。

#### 三宅雪嶺 Miyake Setsurei (1860–1945)

明治～昭和前期の哲学者、ジャーナリスト。本名は三宅雄二郎。1860年加賀藩金沢（現・石川県金沢市）の医師の子として生まれる。河波有道の私塾で漢学を学び、金沢の仏語学校と英語学校でそれぞれフランス語と英語を習う。愛知英語学校、開成学校を経て、1879年東京大学文学部哲学科に入学。フェノロサや原坦山らに学ぶ。1883年哲学科卒業後、同年から東京大学編輯所で日本仏教史の編集に従事する。1886年文部省編輯局に移るが、翌1887年同局を退職し、東京専門学校（現・早稲田大学）と哲学館（現・東洋大学）で講義を担当し始める。当時の講義録のほか、シュヴェーグラーとクーノー・フィッシャーをもとにした西洋哲学史の教科書『哲学涓滴』（文海堂、1889年）から、講義の情景が窺える。その一方

で、1888年井上円了や志賀重昂らと政教社を設立し、機関誌『日本人』（のちに『日本及日本人』）を創刊。同誌への寄稿を通して、政府の欧化政策を批判し、国粹主義を主張するようになる。同時期には、陸羯南が主筆を務めた新聞『日本』にもしばしば寄稿している。その後、『真善美日本人』（1891年）、『偽悪醜日本人』（1891年）、『我観小景』（1892年）を通して、国粹主義のジャーナリストとしての地位を確立する。1923年編集方針の対立から『日本及日本人』を去り、中野正剛とともに雑誌『我観』を創刊する。同誌は以後1945年まで刊行を続ける。特に20年間にわたる連載「同時代観」は有名で、のちに『同時代史』（全6巻、岩波書店、1949–1954年）として出版される。1943年文化勲章を受章する。

元良勇次郎 Motora Yujiro (1858–1912)

明治期の心理学者。日本に「心理学」という学問を導入した人物。1858年摂津国三田藩（現・兵庫県三田市）の藩士の家に生まれる。1871年兵庫に出て英語を学ぶ。1875年同志社英学校に入学。在学中に心理学に興味をもち、カーペンター『精神生理』を読む。1879年卒業し、東京農学社で教える。1881年東京英学校（現・青山学院）の設立に尽力し、同教授となる。1883年米ボストン大学に入学し、哲学を学び始める。1885年ジョンズ・ホプキンス大学に移り、スタンレー・ホール教授の下で心理学を学ぶ。1888年同大学を卒業し、博士号を取得。同年帰国し、帝国大学文科大学講師に就任する。そして1890年同教授となり、以来23年間にわたり、心理学や精神物理学を講じた。講義では、ヘルバルト学派の思想から、ヘルムホルツの生理学、フェヒナーの精神物理学、ヴィルヘルム・ヴントの実験心理学、ウィリアム・ジェームズの心理学、そして草創期の社会心理学までを広く紹介した。演習ではヴントやジェームズの講読を行った。こうした講義と演習により、多くの心理学者を育てた。1912年在任中にカリエスのため死去。著書に『心理学』（金港堂、1890年）、『心理学』（敬業社、1897年）、『心理学綱要』（弘道館、1907年）等があるほか、中島泰蔵とともにヴィルヘルム・ヴント『心理学原論（*Grundriss der Psychologie*）』（1896年）を翻訳し、『ヴント氏心理学概論』（全3巻、富山房、1899年）として刊行している。